

国語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

出題傾向

※第二問は現代文または古文のどちらか選択

入試日程	大問	問題文筆者・書名(出典)	難易度
2/3	第一問	大沢真幸『社会学史』	標準
	第二問 【古文】	『古今著聞集』	やや難
	第二問 【現代文】	橋本治『精読 学問のすゝめ』	標準
2/4	第一問	梶谷真司『考えるとはどういうことか』	標準
	第二問 【古文】	『無名草子』	標準
	第二問 【現代文】	阿部謹也「甦える中世ヨーロッパ」	標準
2/5	第一問	山鳥重「脳の働きと心の働き」	標準
	第二問 【古文】	『御伽物語』	標準
	第二問 【現代文】	森田真生『数学の贈り物』	標準

【現代文】

2020年度は、一題を除いて、評論文の出題だった。

問題文のジャンル・テーマは、構造主義批判、『学問のすゝめ』解説、哲学的自由論、ヨーロッパ中世史、脳と心理、と様々で、2月5日の第二問のみ随筆であった。多くは論理展開や論旨の明確な文章の出題である。

設問は、漢字、語句の意味、接続詞や語句の空欄補充、傍線部の内容説明または理由説明、その他内容理解に関する問題、趣旨合致、内容合致など、入試の定番である。設問数は第一問で10～15問(マーク数17～19)、第二問で11～13問(マーク数12～13)。解答形式は全てマークシート方式(原則として五肢択一)である。設問全体の難易度は、総じて標準であると言える。

○第一問

文章量は、約3,560字～4,960字程度で、昨年より若干増えている。設問内容は漢字の書き取り、語句の知識を問う問題、空欄補充問題(接続詞・語句)、内容理解に関する問題、内容合致もしくは趣旨合致問題など。

○第二問

文章量は、2月3日が約6,040字、2月4日が約4,160字、2月5日が約1,770字、と日程によりかなりのばらつきがあった。設問内容は、漢字に関する問題が少ないだけで、第一問と比べてあまり違いはない。

【古文】

2019年度の出典は、全て鎌倉時代の説話であったが、2020年度は説話、評論、仮名草子である。文章量は、2月3日が約1,060字、2月4日が約580字、2月5日が約1,610字とばらつきがある。設問数は10～14問(マーク数13～14)。設問内容は、単純な語義の問題は比較的少なく、文法、文学史、漢字の読み、敬意の対象、解釈、理由説明、表現理解、心情理解、内容理解など多彩である。具体的な傾向は以下の通り。

- ・ 解釈の問題は、単なる傍線部の直訳を選ばずむのではなく、前後の内容を踏まえて判断しなければならないことが多い。2月3日では、ずばり「意識として適切なものを」選ぶ問題が5問出題されている。単純な選び方が通用しない問題が多い。
- ・ 文法問題は、品詞分解(2回)、助動詞の意味、活用形という出題であった。
- ・ 内容理解型の問題は、文章の中で起こっている事柄の読み取り、登場人物の心理や思考の理解など深い読解力が必要なものが多い。
- ・ 2019年度に引き続き、主体判定や敬意の対象など、省略されている主体客体の把握ができていのかどうかを問う設問はやや少なかった。
- ・ 2019年度に引き続き文学史の問題が、3日程とも出題された。2月3日は二題出題されている。

総じて、幅広い知識と、文脈を正確に読み取る力、選択肢を丁寧に吟味することを要求する問題である。解答形式は全てマークシート方式(原則五肢択一)。設問全体の難易度は、総じて標準であると言える。

国語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

学習対策

【現代文】

●筆者のイイタイコトをつかまえよう

評論の筆者は自分の意見（イイタイコト）を読者に伝えようとして文章を書く。しかし、ただイイタイコトをそのままぶつけても誰も納得してくれない。そこで、論拠を挙げ論理的に説明を加えて自分の意見に説得力を持たせようとする。入試現代文は、その筆者のイイタイコト、論の展開を受験生がしっかり把握することができたかどうかを調べるために設問設定をしている。よって、問題を解く際は、まずこの文章では何がテーマ（話題）になっているのかをつかまえ、接続詞や強調語などを道しるべに、筆者の論の展開を正確にたどり、最終的にこの文章のイイタイコトはこれなのだ把握するようにしよう。そのためには、普段から新書レベルの読書を心がけ、ただ漫然と読むのではなく、各章・各節で上記のことを意識するとよい。問題集に取り組む際も同様である。

●幅広く国語の知識を身につけよう

梶山女学園大学では、第一問・第二問を通して漢字や語句など、知識を問う設問が多く出題されている。知っていれば解ける問題である。漢字の問題集や国語知識の問題集に取り組み、評論でよく使われるような語句などをマスターするとよい。また普段の生活や読書を通して、知らない言葉や事項に出合ったら、こまめに辞書や国語便覧を調べるなどして語彙力や知識を身につけるよう心がけよう。漢字の問題集をやる時も同様である。また文学史が出題されることがあるので、問題集や国語便覧を通して、著名な文学者とその作品名、主義、流派などを覚えておこう。

●マーク式問題になれよう

大学入学共通テスト問題集やマークシート方式の私大対策問題集に取り組もう。ただやみくもに読んでなんとなくピンと来た選択肢を選ぶのではなく、繰り返しになるが、その文章のテーマがどうで、どういう論理展開で、どういう結論（イイタイコト）を導いているのかを把握した上で、設問に取り組むこと。マーク式の問題集は上記のことが押さえられていれば選択肢の一つに絞られるように作られている。選択肢で迷った時には、選択肢をじっくり見て考えるのではなく、設問が何を問っているかを押さえた上で、常に本文に立ちかえり、本文と選択肢、選択肢相互の異同を照合して判断するようにすること。また全体の設問量が多いので、過去問に取り組んで、時間配分の練習をしておくとうい。

【古文】

●基礎知識の充実をはかる

現代文と同じく、古文の問題も、単語や文法、文学史などの基礎知識があれば解答できる問題も多い。また、解釈問題はかなり意識した選択肢が正解で、一見高度な問題に見えるものも多いが、まずは文法や単語知識で選択肢を絞り、その後本文内容と照らし合わせて確認すれば正答できるものもある。ベースは基礎知識である。

古語については400～500語程度を単語帳などでマスターすること。重要古語のほとんどは多義語であり、複数の訳し方を身につけておかなければならない。その語の語源・語感を理解した上で訳し方の幅を押さえ、例文の中でふさわしい訳語を選ぶ練習をすること。

文法は用言の活用を基礎として、助動詞の接続・活用・意味・訳し方、助詞の意味・訳し方、敬語の種類・用法をきちんと覚えておくこと。「なむ（なん）」「らむ（らん）」「なり」「ぬ」「に」「る・れ」など頻出の識別問題にも慣れおきたい。以上のような文法知識は解釈問題の選択肢選びの際にも強力な武器になるはずである。文学史、古典常識についても地道な努力を続けてもらいたい。

●一人で文章を読み解くことに慣れよう

上記の基礎知識を身につけつつ、私大対策の問題集を使って、実際の問題の中で知識を使って解く練習をしよう。問題文の中で学習した単語に出会い、その文脈での意味を考えたり、傍線部の中にある重要古語、助詞・助動詞、敬語に着目して選択肢を絞ったり、あるいは解けなかった問題、間違えた箇所に含まれる単語や文法事項をもう一度辞書や文法書に立ちかえって確認したりする中で、基礎知識の定着をはかろう。また、問題集で出合った作品について国語便覧を使って文学史的な面を調べる、設問に出てきた文学史事項や古典常識について学習するなど、有機的な学習をしよう。

●作品として味わおう

現代語訳や解釈の問題、内容理解の問題では深い読解力を要求するものもある。問題集で文章を読む際、単に語学的な分析（単に現代語に置き換え訳す）のレベルでとどまるのではなく、その文章の中でストーリーがどのように動いているのか、この箇所ではどういう事柄が起こっているのか、この部分で登場人物がどんな心理状態にあるのかを読み取るように心がけよう。また、セリフについても、ここでその登場人物はどのような意図でそんなことを言うのか、なぜこんな発言をするのかまでを考えて、作品を味わい、深い読解力を身につける努力をしてほしい。